

覺坊手をすりてうつし心なく、醉たる者に候、まげてゆるし給はらんといひければ、をのく、嘲て過ぬ、此男具覺房にあひて、御坊は口をしき事し給つる物かな、をのれゑひたる事侍らず、高名仕らんとするを、ぬける太刀むなしくなし給ひつる事といかりて、ひたぎりにきりおとしつ、さて山だちありとの、しりければ、里人おこりて出あへば、われこそ山だちよといひて、はしりかかりつ、きりまはりけるを、あまたして手おふせ打ふせてしぱりけり、馬は血つきて、宇治大路の家にはしり入たり、淺ましくて、をのこともあまたはしらかしたれば、具覺坊はくちなしはらにゑひふしたるを、もとめ出てかきもてきつ、からき命いきたれど、腰きり損せられてかたはに成にけり、

〔本朝食鑑〕四葉柿

或語予必大平野曰、每好大酒者、割乾柿作兩片、用一片塞臍、令帶緊縛、而後飲酒、則連日不倒、予既試之、沈醉後取臍中柿而見之、酒浸熟甚臭、是柿內引酒於臍竅者也、故知柿之解酒毒而已、

〔江戶買物獨案内〕下仙傳酒禁丸藤田氏製

夫酒は養壽の奇品と雖ども、多く喫する時は氣を慄口し、行を敗り心を亂甚しきは家邦を喪す、輕ければ病を致し命を隕す、故に長壽は下戸に多し、慎むべし、○中此藥を用ゆる時は、胸中の酒癖をさる、故に、上戸と雖ども酒を飲んとするの心疎くなりて、自然と下戸となる也、又大酒豪飲の人も、三兩杯の樂酒となりて、身の害をなす事なし、吐血を止め胃熱を清し氣血を行し、胸腹の留飲をさり、齒をかたくし、目を明にし、ざくろ鼻を治し、内損を補ひ、若癩、中風、よいく、水腫、黃胖、總て酒より發る病治せずといふ事なし、酒ぐせのわるき人需服すべし、

賣弘所

〔催馬樂〕呂

此殿、奧二段、拍子各八、與此殿、西同音、

日本橋通三丁

目東側中程
藤田屋熊治郎製